

『砂漠の国の柔道場』（完）

第十話『クウェイト国柔道中興の祖・甲斐光八段』

岡本文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

アラビア石油のカフジ鉱業所へ赴任する以前から、クウェイトには JICA（国際交流基金）経由で、甲斐光（カイアキラ）さんがナショナルチームを指導する師範（当時講道館柔道五段）として赴任されているという話を聴いていた。オリンピックに並ぶ世界の精鋭集う国際大会『加納治五郎杯』にクウェイト選手も参戦するというので、日本武道館に応援に駆けつけたのだが、開会式で感心させられたことがあった。各国の選手たちが列をなしてズカズカと畳に上がっていくのに対して、三人のクウェイト選手だけが深く一礼をして上がっていくのを清々しい思いで見守った。これは、指導者が畳の上は修行や試合をする神聖な場所だという正統派の講道館柔道を指導し徹底していることの証だった。その他の国の選手たちに悪気はないのだろうが、民族性や社会通念の違いはあるし、柔道に対する認識も様々だ。礼に始まり、礼に終わる精神性の徹底からは、甲斐師範が高次元の柔道哲学を以ってナショナルチームを指導しておられることが容易に推察された。

その 3 年後に、筆者自身もクウェイト国境に近いサウディアラビアの石油開発現場で、仕事の合間に 40 畳の道場を開設しアラブの青少年に柔道指導するに到るのだが、稽古始めと終わりには、自らが箒で道場を掃除したものだ。師範にそんなことをさせては申し訳ないと思った大人の弟子たちが、ある日オフィスポーイ（雑役夫）を連れて来て「Sensei、あなたがする仕事じゃない」と、彼らなりの好意を示そうとした。見ると、雑役夫は汚い水で濡らしたモップを持って土足で畳に上がってくるではないか。

「コラッ！止めろ！道場は修行のための Holly Place だ！」

アラブ人の弟子たちに全く悪気はないにせよ、認識の違いとはそんなものだ。それ以来、弟子たちが箒を奪い合って、自分で道場を掃除するようになった。

加納治五郎杯に出場した三選手は、軽量・中量の二人は一回戦で力負け。重量級のハッサン（だったかな？）選手だけが、一回戦で優勢勝ちしたが二回戦で敗退した。まだまだ、柔道の発展途上国のクウェイトだったから、よく二回戦まで進んだと健闘を讃えたかったのが正直な印象だった。選手たちを引率された甲斐師範には、「私も遠からず赴任しますので、現地でもよろしく交流して下さい」と、ご挨拶出来た。

『第一話』で既述したように、柔道場を開設した筆者は、通算 8 年の現地勤務の間に約 7 年間、アラブの青少年を指導した。一回目の赴任時には 189 名、二回目の勤務時には 60 名。合計 249 名の弟子たちを得て、柔道がカフジでの仕事と生活の充実に大いに寄与してくれたと感謝している。

諸事無理をしない酷暑の地域の民族だから、日本人のように修行が長続きした弟子は少ないのだが、それでも熱心に付いてきた弟子には正式に昇段昇級の形で報いてやりたかった。アマチュアに過ぎない筆者には昇段昇級の審査資格はないので、クウェイトの甲斐師範にご協力をお願いして快諾を得た。

一回目の現地勤務を終える時には、最優秀の弟子 1 名に初段を、2 名には一級（茶帯）の免状を授与することが出来た。

現地赴任の間、甲斐師範には本当にお世話になったと心から感謝している。カフジの北 180 キロの地には、本物の日本人柔道指導者がおられるという事実だけで、心の励みになった。また、田舎町に過ぎないカフジからは、都市機能を十分に満たしているクウェイトに、月に一度は生活物資の大量仕入れに行くのだが、甲斐さんご一家には時々お世話になったものだ。

甲斐五段の着任当時のクウェイトではエジプト流柔道の影響が強く、その系譜をひく町道場（というよりは、ジム）が乱立していたとのことだ。そこで、甲斐師範は精神性を重んじる講道館柔道を定着させるための大改革を断行された。まず、指導者講習会を開催し、ローカル色掛かった柔道に正統派柔道哲学と稽古方法を徹底し、短期間のうちにクウェイト柔道のレベルアップを実現した。

甲斐師範の啓蒙活動は、クウェイト・メディアの注目を集めて、クウェイト TV や新聞（Kuwait Times）は度々報道した。そして、国内の有望選手を次々にナショナルチームに集めた。

その顕著な発展事例としては、インドネシアで開催されたアジア柔道選手権大会で、銅メダルを 4 個獲得し、日本、台湾、韓国、香港、インドネシアに次いで第 6 位の成績を収めた。

また、モントリオール・オリンピックに 4 名の選手を出場させることが出来た。

（これを報じた読売新聞記事を文末に添付する）

そうした甲斐師範のクウェイト滞在は、3 回通算 13 年間に及び、ナショナルチームの弟子たち始め多くの市民の尊敬を集めて、クウェイトで最も有名な日本人となったのは当然の成り行きだった。

筆者の一回目の現地勤務時のある日のこと。原油出荷部門に勤務しており、

Shipping Document (船積書類) のサインで忙しくしているところへ、体格の良い青年が現れた。

「Okamoto Sensei ですか？」「そうだが、エンタ・ミーン？ (誰だ、キミ?)」

「Ali と申します。Kai Sensei のナショナルチームの弟子です。今度、アラビア石油に入社して資材部に配属になりました。カフジに行ったら、Okamoto Sensei にご挨拶して、彼の道場で稽古させて貰いなさいと指示されました」

柔道人脈の面白いところではないか。勿論、Ali の入門は大歓迎であった。

「早速、今週から参加しなさい。ただし、ナショナルチームの道場のように立派なものではないけどね。大人の部の稽古は、毎週土曜日だ。少年の部、子供の部もあるが、指導を手伝うつもりがあるなら、全部に顔出ししても良いぞ」

「私は、毎日クウェイトから車で通勤してますので、早速今夜、Kai Sensei に Okamoto Sensei にご挨拶できたと報告します」

彼は、ナショナルチームのフランス遠征などにも参加したキャリアがあり、日本で昇段試験を受けさせたら、三段くらいならクリアできるレベルにあった。

大人の部の稽古には皆勤したし、少年や子供の指導にも喜んで参加してくれた。

そして、甲斐師範と筆者との連絡役も務めてくれた。

さらに半年後、Ali が甲斐師範からのメッセージを届けてくれた。

クウェイトでは、Ahmadi Sports Day という Kuwait National Petroleum Company (国営石油公社・KNPC) が主催する、国内で行われている全スポーツの祭典がある。我が国における国民体育大会 (国体) のようなものだ。

勿論、柔道もそのひとつであり、KNPC の大体育館を試合場として大会が行われるのだが、筆者も出場してはどうかとの甲斐師範からのお誘いだった。

想定外のお話に驚いて、甲斐師範に国際電話して確認してみた。

「僕は日本人だし、出場資格なんかないでしょう？」

「ナアニ。私が OK と言えば、それで決まりですよ (笑)」

クウェイト柔道界を仕切る大師範の豪快な一言であった。

「それじゃあ、出場しましょう。よろしくお願いします」

その時の筆者の年齢 35 歳。多少体を動かしていたというものの、元々が大した柔道選手でもないのに、身の程知らずにもよくぞ参戦したものだ。どこまで戦えるかというよりも、クウェイト柔道の水準を体感してみたいという興味があった。

一回戦の対戦相手は、筆者と同じくらいの体格の若者だったが、寝技の合わせ技で勝ち抜くことが出来た。どうも、これは甲斐師範の暖かいご配慮で、勝てそうな相手を組み合わせさせて頂いていたのではないかと推察できる。

問題は、二回戦。対戦相手はその年のクウェイト柔道選手権者である青年 **Hisham Rashid** だった。組み合った瞬間、しっかりした体幹と俊敏な動作にただものではないと直感した。受けに回るまいと先手を打って、右自然体から左袖釣り込み腰で意表を突こうとしたのだが、見抜いた **Hisham** は巧みにこれを外した。四つん這いになった筆者の左肩にのしかかって腕をひっかけて大きく後ろに反り返った。お手本のような腕ひしぎ十字固めが決まって一本負け。

決勝戦は、**Hisham** のライバルでモントリオール五輪選手だった **Mohamad Galib** との白熱の対戦だった。迫力あふれる見ごたえのある攻防の末、**Hisham** が熱戦を制して、国体の優勝者となった。

ここでも、甲斐師範の日頃の教育成果の素晴らしさを認識することが出来た。

Hisham が表彰式の後、わざわざ筆者に挨拶しにきて、年長者への敬意を込めて慰めてくれたのだった。

「Sensei。最近、あんまり稽古しておられないのでしょうか」

この『礼に始まり、礼に終わる』を体得している青年に対して、勿論、筆者は答えた。「Congratulation！キミはよく稽古してるなあ！」

時は移り、筆者が古希を迎えた時、嬉しい意味での晴天の霹靂が起こった。思いもよらないことに、クウェイト柔道連盟から、『柔道七段』の荣誉ある免状が届けられたのだった。勿論、これは甲斐師範の暖かい友情に発するご配慮によって、「クウェイト柔道史上、国体に出場した唯一の事例である変わった日本人がいたなあ」と柔道連盟も賛成してくれたのであろう。アラブでの柔道交流に対する褒章として、有難く拝受した次第である。

柔道を人生のバックボーンだと認識する筆者ではあるが、柔道マンとしてのレベルはたいしたものではないことは自分自身でよく解っている。

カフジで多くのアラブの若者に指導したとはいっても、甲斐師範とは違って、所詮『鳥なき里のコウモリ』であった。しかし、柔道文化の無風地帯における普及活動への最大の理解者でいて頂いた甲斐師範には、筆者の活動の組織性と継続性を高く評価して頂いた。甲斐師範から頂戴したお褒めの言葉が忘れられない。

「私は、仕事としてナショナルチームの指導をしています、岡本さんはオイルマンとしての任務を果たしつつ、柔道の指導をしておられるんですからたいしたものです」。

元々は柔道参段であった筆者だが、一回目の現地勤務時代には四段へ、二回目は五段へ昇段推選頂いた。これが筆者の柔道普及活動への最大の励ましになったことは間違いなく、本稿を通じて甲斐師範に改めて篤く感謝申し上げる次第である。

[甲斐光師範略歴]

1948 年生まれ。講道館柔道八段 日本大学柔道部出身。1969 年全日本大学柔道選手権団体戦優勝。大学卒業後、長期に渡ってアラスカ、クウェイト、マダガスカル等の海外柔道普及活動に従事。

日大柔道部時代の同期生のライバル・高木長之助選手が全日本柔道選手権出場 10 回（準優勝 3 回）を記録しており、もし甲斐さんが日本国内で活動しておられたなら、当然全日本選手権出場の常連のひとりであったであろうと、甲斐さんファンのひとりとしては残念に思う次第です。



指導者講習会で講道館柔道を徹底する甲斐五段（当時）の雄姿

中東の三四郎、まだ力不足

柔道 柔道監督と中量級マフ選手



柔道競技 百目の軽重級での第一戦、マヤツエ三三宮は目をこすったという。相手のクウェートのサレム選手の指が茶色に染えたから。オリンピックの柔道選手

なのに、晴れの舞台に茶襟で登場するなんて、なんというヘソ曲がりとお思いなろうが……。だが、それにはクウェートの事情を聞いていただきたい。



して昨年三月、やっと本場日本から甲斐光(あきら)監督を招いてきた。

クウェートの選手は陸上、フットボール、水泳の飛び込みと柔道の四種目十八人だが、視察員や付け人が百人を越し、そのほとんどが柔道関係者。石油でうるちう豊かな国が、日本文化である柔道に大きな魅力を感じたのである。

甲斐監督はいう。「オリンピックに出場するのだから、選手たちには初段をやって黒帯をしめさせてやれ、といわれたが断りました。中東にはエシフト五段など、いろいろな段位がありますが、私は講道館の免状でないとダメだといっているんです」

「十月にはアラブ・オリンピック(シリアのダマスカス)があります。それまでになんとか黒帯をとら思っています。クウェート人は楽しく、楽しんで強くなろう、という考え方だから、むずかしい問題です」と甲斐監督。しかし四人の選手は一生懸命だ。今、クウェートでは柔道を文部省が奨励し、小、中学校では体育の必修科目にはいった。日本製の畳を千五百枚仕入れ、黒帯を心待ちしている。

クウェートに柔道が輸入されたのは一九六九年。クウェート柔道連盟のパテイルオマー現会長がエシフトで見た柔術を、柔道だと思つて強化に乗り出したという。その願いもむなしく、中量級のマフ

が、メダル意識がおつ盛なのに驚いた。その選手たちに「私を6分間いっばいベンチに座らせてくれ」とだけ約束させた。しかし、柔道選手たちは、監督の願いもむなしく、中量級のマフ

(小上特派員)

クウェイト選手のモンテリオール五輪出場を報じる読売新聞(昭和51年(1976年)7月30日(金曜日)15面)



甲斐師範のご配慮でクウェイト国柔道連盟から筆者に授与された七段免状



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段(クウェイト国柔道連盟七段)。

Documentary Essay

"Judo Gymnasium in a Desert Country" Chapter 10

"Master Kai's Great Contribution, as the Missionary of Traditional JUDO to Kuwait"

Fumio Okamoto (Former Arabian Oil Company, Former Secretary of State for Policy)

Even before I was assigned to the Khafji Field Office of Arabian Oil Company, I had heard through the Ministry of Foreign Affairs that Mr. Kai Akira (then 5th Dan in Kodokan Judo) had been assigned to Kuwait as a master instructor for the national team.

I rushed to the Nippon Budokan to cheer on Kuwaiti athletes competing in the Kano Jigoro Cup, an international tournament comparable to the Olympics, gathering the world's elite.

I was impressed by the opening ceremony. While athletes from each country filed up onto the tatami, I watched with a sense of relief as only three Kuwaiti athletes bowed deeply before stepping up. This was proof that the instructor was thoroughly committed to teaching authentic Kodokan judo, which holds that the tatami mat is a sacred place for training and competition.

While the athletes from other countries likely had no ill intentions, differences in ethnicity and social norms exist, and perceptions of judo vary widely. From his thorough emphasis on spirituality, which begins and ends with a bow, it was easy to deduce that Kai Sensei was coaching his national team with a high-level judo philosophy.

Three years later, I myself opened a 40-tatami dojo in my spare time at an oil development site in Saudi Arabia near the Kuwaiti border, where I taught judo to young Arab people.

I would often sweep the dojo by myself with a broom at the beginning and end of each lesson. Feeling sorry my doing such a thing, one day adult students brought an office boy over to show their goodwill, saying, "Sensei, that's not your job."

I looked over and saw the handyman stepping onto the tatami mats with his shoes, carrying a mop soaked in dirty water.

"Hey! Stop! The dojo is a holy place for training!"

Arab students had no ill intentions, but that's just the difference in perception. From then on, the students began fighting over the brooms and cleaning the dojo by themselves.

Of the three Kuwaiti judo athletes who competed in the Kano Jigoro Cup, the two in the lightweight and middleweight classes were defeated in the first round. Only Hassan (I think that was his name) in the heavyweight class won by advantage in the first round but was eliminated in the second. Kuwait was still a developing country for judo, so I honestly felt like I wanted to praise his efforts for making it to the second round.

I was able to greet Master Kai, who was accompanying the judo team, and say, "I'll be posting there soon, so please look forward to interacting with me there."

As mentioned in chapter 1, I opened a judo gymnasium and taught Arab youth for around seven of my eight years of local assignment. I had 189 students during my first posting and 60 during my second. I had a total of 249 students, and I'm grateful that judo greatly contributed to enriching my work and life in Khafji.

Because the Arab people of this scorchingly hot region are not known for pushing themselves too hard, only few students were able to continue training for as long as Japanese trainee. However, I still wanted to reward those who persevered by officially promoting them in rank. As I'm merely an amateur, I'm not qualified to be judged for rank promotions, so I asked Master Kai in Kuwait for his cooperation, and he readily agreed.

At the end of my first posting, I was able to award first-dan certificates to one of my best students, and first-kyu (brown belt) certificates to two others.

I'm truly grateful to Master Kai for all his help during my time there.

Just knowing that there was a genuine Japanese judo instructor 180 kilometers north of Al-Kahji was heartening me. Furthermore, Al-Kahji is merely a rural town, so I would travel to Kuwait, a city with all the necessary urban functions, once a month to purchase large quantities of daily necessities, and the Kai family would occasionally welcome me.

When Kai 5th Dan took up his post in Kuwait, Egyptian-style judo was heavily influenced by it, and there were apparently many local dojos (or rather, gyms) following in its footsteps.

So, Master Kai implemented major reforms to establish Kodokan judo, which emphasizes spirituality. First, he held instructor training sessions and thoroughly instilled orthodox judo philosophy and training methods into the locally influenced judo, quickly raising the level of Kuwaiti judo.

Master Kai's educational activities attracted the attention of the Kuwaiti media, with frequent coverage on Kuwaiti TV and in the Kuwait Times newspaper. He then steadily recruited promising athletes from around the country to the national team.

One notable example of this progress was when the team won four bronze medals at the Asian Judo Championships held in Indonesia, placing sixth behind Japan, Taiwan, South Korea, Hong Kong, and Indonesia.

The team was also able to send four athletes to the Montreal Olympics.

(Yomiuri Shimbun, major newspaper in Japan reporting this is attached at the end of this article.)

Master Kai's three stays in Kuwait lasted a total of 13 years, earning him the respect of his national team athletes and many local residents, and it was only natural that he would become the most well-known Japanese person in Kuwait.

One day during my first time working there, I was working in the crude oil shipping department, busy signing shipping documents, when a well-built young man appeared.

"Are you Okamoto Sensei?" "Yes, but who are you?"

"My name is Ali. I'm Kai Sensei's national team student. I've just joined Arabian Oil and been assigned to the Materials Department. I was instructed to go to Khafji, say hello to Okamoto Sensei, and ask to train at his dojo."

That's the interesting thing about judo connections. Of course, Ali was very welcome to join.

"You can start joining us this week. It won't be as fancy as the national team's dojo, though. Adult practice is every Saturday. There are also junior and children's divisions, and if you'd like to help me, you can attend all of them."

"I commute from Kuwait by car every day, so I'll report to Kai Sensei tonight that I was able to say hello to Okamoto Sensei."

He had participated in the national team's tour of France and other events, and if he were to take the promotion test in Japan, he would be at a level where he could pass the rank of second dan.

He attended all adult training sessions and happily participated in teaching boys and children. He also served as a liaison between me and Master Kai.

Six months later, Ali delivered a message from Master Kai.

In Kuwait, Ahmadi Sports Day is held, a festival for all sports held in the country, organized by the Kuwait National Petroleum Company (KNPC). It's like our National Sports Festival (Kokutai).

Of course, judo is one of the events, and the tournament takes place in the KNPC's large gymnasium. Master Kai had invited me to participate.

Surprised by this unexpected offer, I called a phone to Master Kai internationally to confirm.

"I'm Japanese, so I'm not eligible to participate, right?"

"What? If I say it's OK, then it's settled (laughs)."

A bold statement from the great master who controls the Kuwaiti judo world.

"Well, let's compete. I look forward to it."

I was 35 years old at the time. Though I'd worked out a bit, I wasn't a particularly impressive judo player. Despite my lack of confidence, I was amazed to enter the competition.

Rather than wondering how far I could go, I was interested in experiencing the level of Kuwaiti judo by myself.

My first-round opponent was a young man about my size, but I managed to win by combining ground techniques. I suspect this was due to Master Kai's kind consideration, who had paired me with an opponent I thought I could beat.

The problem came in the second round. My opponent was Hisham Rashid, the young champion of Kuwait that year. The moment we grappled, I sensed something special about his strong core and agile movements. I tried to take the initiative to prevent him from being forced to defend, and attempted a surprise left sode-tsurikomi-goshi from a right natural stance, but Hisham saw through my move and skillfully dodged it. As I got down on all fours, he leaned over my left shoulder, hooked my arm, and arched his back. He applied

a textbook armbar, giving me a point-blank defeat.

In the final, Hisham faced his rival, Montreal Olympian Mohamad Galib, in a heated match. After a thrilling and exciting battle, Hisham emerged victorious and became the National Athletic Meet champion.

Once again, I was able to appreciate the incredible results of Master Kai's daily training.

After the award ceremony, Hisham came to greet me and comforted me with a gesture of respect for an elder.

"Sensei, you haven't been practicing much lately, have you?"

Of course, I replied to this young champion who had mastered the principle of "beginning and ending with courtesy." "Congratulations! You've been practicing well!"

Time passed, and when I turned 70, I received a welcome unexpected honor. To my surprise, the Kuwait Judo Federation presented me with the prestigious "7th Dan Judo" certificate. Of course, this was due to Master Kai's warm friendship and consideration, as the Judo Federation recognized me as "an unusual Japanese person, the only one in the history of Kuwaiti judo to have competed in the National Athletic Meet." I gratefully accepted the certificate as a reward for my judo exchange with the Arab people.

Though I consider judo to be the backbone of my life, I am well aware that my level as a judo practitioner is not particularly impressive.

Although I taught many young Arabs in Khafji, unlike Master Kai, I was ultimately a "bat in a birdless village." However, Master Kai, who was the greatest supporter of my efforts to promote judo in a climate uncharted by judo culture, highly praised the organization and continuity of my work. I will never forget the words of praise he gave me:

"I coach the national team as my job, but Mr. Okamoto, you're able to teach judo while fulfilling your duties as an oilman. That's quite impressive."

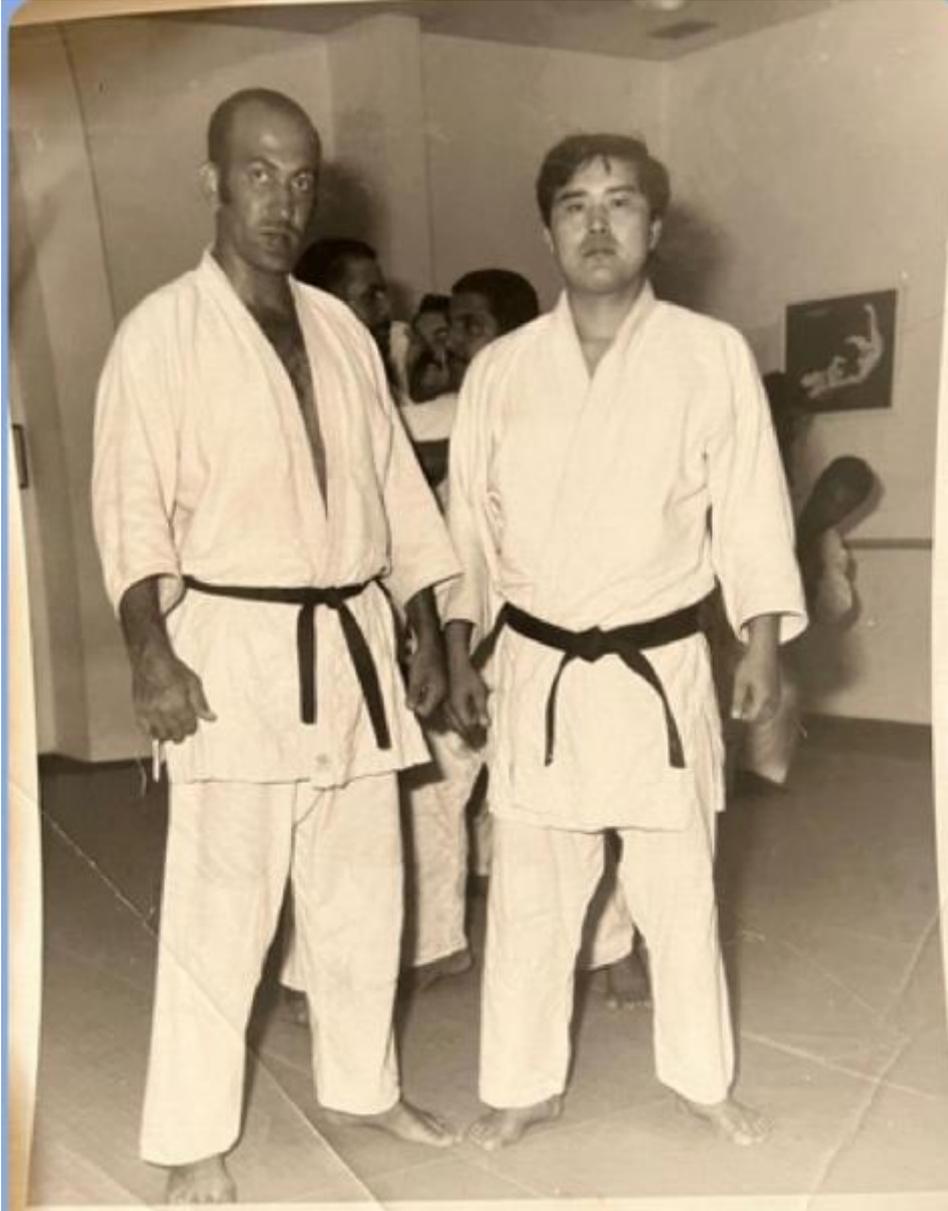
Originally a third-dan in judo, I was promoted to fourth-dan during my first assignment there, and fifth-dan during my second. This was undoubtedly the greatest encouragement

I received in my judo promotion efforts, and I would like to express my sincere gratitude to Master Kai through this article.

[Brief Biography of Master Kai]

Born in 1948. 8th-dan in Kodokan Judo. A graduate of Nihon University's Judo Club. Winner of the team competition at the 1969 All-Japan University Judo Championships. After graduating, he spent many years promoting judo overseas, in places such as Alaska, Kuwait, and Madagascar.

His rival from his days on the Nihon University Judo Club, Chonosuke Takagi, competed in the All-Japan Judo Championships 10 times (with three vice champion), and as a fan of Kai's, I feel sad that he would not be a regular at the All-Japan Championships if he had remained active in Japan.



The heroic figure of Kai, then 5th dan, thoroughly practicing Kodokan judo at an instructor's seminar.

中東の三四郎、まだ力不足

クウェート柔道
甲斐監督と中
量級マズ選手



柔道競技「百目の軽量級」での
第一戦、「オヤツと三」は目をこ
すったという。相手のクウェート
のサレム選手の柄が茶色に厚えた
からだ。オリンピックの柔道選手



なのに、晴れの舞台に茶柄で登場
するなんて、なんというヘソ曲が
りとお思いなろうが……。だが、
それにはクウェートの事情を聞い
ていただきたい。

クウェートに柔道が輸入された
のは一九六九年。クウェート柔道
連盟のパテイルオマー現会長がエ
ジプトで見た柔術を、柔道だと思
って強化に乗り出したという。そ

甲斐監督はいう。「オリンピック
クに出場するのだから、選手たち
には初段をやって黒帯をしめさせ
てやれ、といわれたが断りまし
た。中東にはエジプト五段など、
いろいろな段位がありますが、私
は講道館の免状でないとダメだと
いっているんです」

彼は日大出身の五段。同窓には
審判席の上目、高木、二年後輩に
は連盟がいる。クウェートの柔道
家は、日本ではいへばせいせい
一級から三級までの実力にすぎな
いが、メタル意識がおう盛なのに
は驚いた。その選手たちに「私を
6分間いっばいベンチに座らせて
くれ」とだけ約束させた。

「十月にはアラブ・オリンピッ
ク(シリアのダマスカス)があり
ます。それまでになんとか黒帯を
とは思っています。クウェート
人は楽しく、楽しんで強くなろう、
という考え方だから、むずかしい
問題です」と甲斐監督。しかし四人
の選手は一生懸命だ。今、クウェ
ートでは柔道を文部省が奨励し、
小、中学校では体育の必修科目に
はいった。日本製の畳を千五百枚
仕入れ、黒帯を心待ちしている。

しかし、柔道選手たちは、監督
の願いもむなし、中量級のマズ
選手も一回戦で見事な体落としし
を食ってマットに沈んだ。

(小上特派員)

The Yomiuri Shimbun reporting on Kuwaiti athletes competing in the Montreal Olympics.
July 30th, 1976



The 7th dan certificate, awarded to me by the Kuwait National Judo Federation, courtesy of Master Kai's consideration.

Fumio Okamoto, Born 1947. Former Arabian Oil, Former Secretary of State for Policy, Author of “Gulf War, The Epic of Oil Men”
Kodankan Judo 5 dan, Kuwait Judo Federation 7 dan